人々のこゝろに生きて。
とことはに姿ぞわかき。

（三十六年二月）

おもかげ

花薔薇咲くなるかげに、
蜘蛛の子の日向ぼこりや、
花びらのこぼるゝ日なか、
はかなさの夢こそさむれ。

現し世のをはりのゆふべ、
死の黒羽こそろとおちよ、
おもかげの夢さながらに、
むねの君あまつみ國へ。

をろの鏡

夕ぐれの小霧のまぎれ、
やま鳥はけはひ靜かに、

野がへりの翼おろしぬ、
やまの井の井手の禿木。

水の面のますみの色に、
やま鳥のをろの鏡や、
くづれの少女が胸に、
そのかみの夢のたゞよひ

眞廣げの退羽たゆげに、
やま鳥は森にかくれぬ。

夢ざめしうつゝの心地、
山の井のふかき吐息や。

夜の幕ゆらゝに落つる
夕闇の醸みのふかみに、
山の井は斧の柄のくつ
束の間を初めて知んぬ。

（三十六年十二月）

戀ごゝろ

草にならばや、
葵のくさに、
卯月なかばの酉の日や、
加茂の御生の片かづら、
君の御髪にかざされて、
一日を榮に枯れたさに、
草にならばや、
あふひの草に。

花にならばや、
菫の花に、
垣ね芝生のあさじめり、
息ざし深き濃むらさき、
きみがあゆみの蹠に、
やをら踏まれて死にたさに、
花にならばや、
すみれの花に。

鳥にならばや、
鶺鴒の鳥に、
山頻白鳴かぬ日も、
枯野の木原くゞりきて、
園生の芭のかたかげに、
君の御聲を聞きたさに、
鳥にならばや、
さゝぎの鳥に。
水にならばや、

岩井の水に、
夏かげ深く湧きあふれ、
一日日盛りうるほひに、
やはら手圓う掬ばれて、
君のみ口に觸れたさに、
水にならばや、
岩井の水に。
貝にならばや、
子安の貝に、

さては遠海のみなぞこに、
吾世沈みて朽ちたさに、
玉にならばや、
眞珠の玉に。

たのむ願ひは、
後世の誓ひ、
わが身七度うまれえて、
七度わが世撰らるとも、
えやは變らめ、戀ごゝろ、

君に捧げてありたさに、
たのむ願ひは、
後世のちかひ。

後の逢瀬は、
さもあらばあれ、
相見がたかる現し世に、
男をみなの人となり、
かたみに深く慕ひよる、
今のえにしを思ひては、

鵜の羽葺屋の通ひ路に、
龍の宮女にはぐれ來て、
濡身を君のましら手に、
御肌の幸を守りたさに、
貝にならばや、
子安の貝に。

蟲にならばや、
竈馬の蟲に、
あり明月夜さし洩るゝ、

さむき厨のいそしみや、
君がなよびの朝すがた、
慰めぐさに鳴きたさに、
蟲にならばや、
いとゞの蟲に。

玉にならばや、
眞珠の玉に、
煌の身きみが紅さしの
指にかゞやく許されか、

さては遠海のみなぞこに、
吾世沈みて朽ちたさに、
玉にならばや、
眞珠の玉に。

たのむ願ひは、
後世の誓ひ、
わが身七度うまれえて、
七度わが世撰らるとも、
えやは變らめ、戀ごゝろ、

君に捧げてありたさに、
たのむ願ひは、
後世のちかひ。

後の逢瀬は、
さもあらばあれ、
相見がたかる現し世に、
男をみなの人となり、
かたみに深く慕ひよる、
今のえにしを思ひては、

後の逢瀬は、
さもあらばあれ。

戀のわな

あけぼの破るゝ光にながれ、
然りやな、
君にまとひて、
面照はなにほてるまで、
さりやな、

戀のたはむれ、
さりやな。

日なか小百合の蕚にかくれ、
さりやな、
君に折られて、
息のかをりに咽ぶまで、
さりやな、
さても口づけ、
さりやな。

夜ぶか夜殿の夢路にひそみ、
さりやな、
をぐな姿や、……
君と花野のめぐりあひ、
さりやな、
胸もゆらゝに、
さりやな。
はては黄泉門の眞闇にしのび、

さりやな、
君を待ちえて、
諸手やはらにかき擁き、
さりやな、
ながき眠に、
さりやな。

貧しき浦里にして

霜月ずゑのさびしさ、

日も夕ばえぬ浦まや、
かなた洲崎のはづれに、
夕づゝ低うかゝりぬ。

苫屋がへりの蜑が子、
ほくそ笑する今宵か、
葦原がくれそよろと、
いさり小舟の滑りや。

巽風のさやぎ、和らに

河原よもぎに掠れて、
渚づたひに消ぬれば、
闇こそ落つれ、ゆらゝに。

かゝる夕、僧尼らは、
沈默ふかげの雲居に、
きくや、足の音、天つ女の
そゞろ歩き、ゆるらかに。

かゝる夕、盲人らは、

微笑み泣くや、忍びに、
心の闇の八衢、——
慈悲の御影見るにこそ。

思へ、浦まのゆふぐれ、
刺網干さんえばしも、
おほみ力にほひては、
和魂かくぞ醉ひぬる。

わが世の寶、憂身の

心よわきへりくだり、
今宵はわきて操に、
その御力のまにまに。

（三十五年十一月）

白膠木もみぢ

神無月のつごもり、
時雨もよひの午すぎ、
乾跡も見えぬ山路に、

白膠木紅葉のこぼれや。
昨日はこずゑ、今日は根、
ゆくへも知らぬ弱げさ、
寂しみふかき身ゆゑに、
大御ぢからのまにまに、
はらゝぎ行くや乾反葉。

もぐらもち

新甞をつゝほどちかき

霜ふり月の朝まだき、
乾反葉しらむ籬根に、
骸こそ見つれ、鼹鼠。

もとより闇の私生兒の、
窖に隠れてあるべきを、
新墾小路うがちきて、
見しは光か、やがて死か。
今はの一目、くらやみの

八百日を夢になぞへしや、
さても瞬き、――大慈悲の
龕の御かげを見隠しに。

げにや死こそは波羅蜜の
岸の夜あけの初ぴかり、
ひかりなればぞ闇住の
身にしも望み、――はた恐れ。

（三十六年十一月）

霜月の一日

洛東若王子路のそゞろあるきに

一

神樂岡のかなたに、
十夜法會もをはりて、
日射よ、日ましに薄れゆけば、
鼠は路をとざして、
眞闇の窖にやすらひ、
燕はいく群伸羽なめて、

高原つゞき南へ、
夏かげたづねて海をこえぬ。

二

野もせの小草しをれて、
都ほとりの白河女、
花筐のさびれを見るにつけて、
み冬の女神白姫、
わが世ひとりのすがれに、
御門の柱にすゝり泣くや、

高萱そよとかすれて、
時雨ぞしのびに注ぎかゝる。

三

なぐれの雨の片寄、
野路まだらの濕りに、
おち葉は乾反の歪み伸して、
濡身伏葉のみだれや、
風は素脚の寒らに、
投荷よ、はらゝに吹き殘して、

蹶ざはり荒くも、
から山木立に急ぎ去りぬ。

四

裝ひ衣すべして、
野山素裸のさびしみ、——
うらびれ心地に眺ひるにも、
睦魂ふかく忍びて、
おほ御力の息ざし、
不壞なる釀しに醉ひの今ぞ、——

わが世譬へば落葉の
それさへ可惜身(弱げながら)。

五

時雨は暫しとだえぬ、——
鈍色あさき雲間に、
ゆふ日のあからみ匂ひほのに、
かなた貴船のあたりや、
虹の環花にうかびて、
かざすと見るまに嫌て消ぬる、

さても刹那のひらめき、——
見るだに涙のせきもあへぬ。

（三十六年十一月）

霜月の一夕

洛東岡崎神社の前にたゝずみて

一

日枝山、照のあかりは、
み空の青にかへりぬ。

山なみひらさき鈍み仄に、
灰がへるやの今はを、
あな『夕暮』のたゆげさ、
しろがね被衣の狭霧ひきて、
立てるや、木原下道、
うなだれ勝なる身樣はなに。

二

黄泉の眞洞の空鳴、
鐘ものうげの動みに、

『ゆふべ』は白みの額をあげて、
心ゆるびのくづをれ、
弱肩そゞろたゆらに、
息ざし深げのたゝずまひや、
その羽含みの醸しに、
目路みな沈默の蕊けごゝち。

三

小風よ、羽向こそろと、
草葉がくれのさゝやきに、

木原の乾反葉みだれ脚に、
ほのぐれ路をかなたへ、
さながら蠱の手練に、
魅魅よ、はらゝに逃ぐる如く、
そゝ走りゆく身輕の、
人酔はしめなるすゞろ種や。

四

かなた水沼の汀に、
青鷺ひとりおりゐて、

漁るとしもなき翁さびに、
物思はしの目ざし、
ま菰水草すがれて、
水面のさびしみ色をふかみ、
夢見心地の見とれに、
さこそは歸さも忘れけらし。

五

今し天なる御力、
なべての胸に躍るや、

隱れの玉琴細緒ゆらに、
鳴るは秘密のさゝめき、
みぎはの眞菰、さびれの
一葉にこもれる聖ごゝろ、
そゝや的矢の逸りに、
身にしも泌み入るきほひ見ずや。

六

この夕暮のせつなさ、
なべての物に流るゝ

奇靈の力のおはひなるに、
さこその覺り、——心の
妙しきゆらぎ見るにしも、
内なる應ひを思ひえずば、
あゝ玉敷の世ながら、
惑ひやいさゝか擁きつらめ。

（三十六年十一月）

花賣女

ひととせ小野の草苅に、
物憂がほなる白河女、
牧の小路の眞夏日ざかり、
木かげに遇ひぬ萱野姫。
やれ、やれ、やれな、
ゆくりな。

『そのかみ、鰐に剝れたる
高草の村の野兎の
素肌に被せし蒲の花鉾、

われにも給べ。』と白河女。

やれ、やれな、

ねがひや。

『兎は肌のさむけさに、

蒲の花鉾得は得たれ、

小百合、なでしこ花こそ殘れ、

汝が故はや。』と萱野姫。

やれ、やれな、

ゆゑよし。

『されば、よ、髪の花かざし、

都おほぢに白鞍の

人もぞ見め。』と面照はなに、

口ごもる樣や、白河女。

やれ、やれな、

恥らひ。

をとめが戀の童氣に、

笑みひろごりし胸乳より、

花は八千種はら〻に落ちて、
野もせの亂れ、萱野姫。
やれ、やれ、やれな、
くれなゐ。

花草ひびに撰りかざし、
あさなあさなの都入り、
まれ白鞍の君をこそ見ね、
なゑはひ得つる白河女。
やれ、やれ、やれな、

花うり。

おもかげ

額しろの
さゝら愛男、
たゆげの少女さび、
白よそほひのくつをれや、
あゝしづか夜の
星の煌路のゆき摩りがひに、

なげく吐息よ、
落葉林の小霧のなびき、
さては茅原のした露。

わが胸の
君がおもかげ、
やはらの真玉肌、
菫かざせるなまめきや、
あゝしのび寝の
胸のゆらぎの堪へせぬなやみ、

したふ心よ、
わが世あらたの生命のきほひ、
さては常世のやすらひ。

澤潟の歌

てもり沼の水鏡の面に、
澤潟のひと花ぐきや、
夏の日の光にぬれて、
息ざしのけはひ深げに。

もゝとせの生命の釀し、
葉とひらき、花とくゆりて、
ひと夏のこゝろ驕りや、
こもり沼の上なだら水。

やはら風そよろの渡り、
葉はゆれぬ、花はこぼれぬ、
沼姫のほくそゑまひか、
さゝら波輪形の皺み。

今しこそ、胸のとろ火の
もゝ絡み、靜かに解けめ。
使ひ女の老女しろ鷺
眠り目の夢見すがたや。

ありや、かの歸依の和魂、
あくがれの心のふかみ、
かゝる日のふと現はれて、
束のまを、——また身隱るゝ。

ことうた

一、待ごころ

こよひ花野の夕づくよ、
君待ちくらす心地して、
月映あかり面はゆき
すゞろ心の胸のときめき。
三歳は過ぎぬ、また更に

誰が子か待ため、當時の
夢ほのかなる戯り、——
はな殼すみれ香に匂ふ世や。

二、海女

君は都のさかしら女、
磯辺の小屋のおとづれに、
蜑が言葉のつたなきを、
いかなればとや問ひ給ふ。

身は海松刈る潜き女の、
浪路のそこに沈み入り、
眞珠、珊瑚の玉しける
龍の宮居に目馴れば、

海の秘密を洩すやと、
おほ海神のうたがひに、
そんなの才を奪はれて、
さは思かしくなりはてぬ。

三、紅梅

雪消の岡のせゝらぎや、
流れ流れてゆくすゑは、
蓴菜つのぐむ大澤へ。

思ひ亂るゝ人の子は、
紫野ゆき、萠野ゆき、
紅梅咲ける君が戸へ。

暮秋野徑の石に凭れて

一

かゝる夕や、野伏は
遠里小野のゆきくれ、
夕映ほのに紅める
豊旗雲を見るにも、
すゞろ遙けき里居の
族が笑やおもひて、
旅路の愛も知るらめ。
それには似ねど吾世の
もの疑ひのわびしさ、
心なぐさの術もと、
ねよるや、あはれ野の石、
しろきは神の額か、
入日にぬれて映げに。

二

千歳を八十の年月、

靜かに、ゆるに、圓らに、
石よ、汝のぬる間を、
人の子ひとり覺めて、
法よ、道よ、何くれの
臺まうけの營み、
休ひもなき姿や。
ひと日天なる高聲、
時こそ來れ、さめよと、
雲路とゝろのどよみに、
夜ながの夢はやぶれて、

みどろきそむる曙、
見るや、いかに、人の子の
小さ臺の片かげ、
くづれの石を枕に、
檻褸素脚の寢ざまを。

三

形に花のきよらさ、
魂にともしのあかるみ、
さてしも人は產れて、

許されの世をたどるに、
路さまたげの何はあれ、
内なる弱み、――まどひの
さかしらがりを見るにこそ、
すぐよか心、――さしものの
きはひも萎れはてぬれ。

四

人さかしらの濁らに、
胸乳の冷をぬくむと、

盗まざりしや、御座の
天つ火盤の火しづく。
雫とみに咀はれて、
損ひものとなれりや、
吾世のほこり、智慧の火、
燃りよ、いよよ明らに、
火かげよ、いよよ陰りぬ。
齋き、何日かは、天なる
もとの姿にかへさめ。

五

間近き麓木原の
乾反葉がくれこそろと、
春つげ鳥のあさりや、
さながら今は里居の
埴生が小屋の乙嫁、
なりはひにこそ疲れ、
やがて白梅咲きくゆる
きさらぎ半ば、涅槃會の
晝あたゝかき門にして、

ほがら鳴する日あるを、
われらいつかは内なる
靈妙の醸にぬくもり、
なべての物に流るゝ
大み光も搦みえて、
いのちの火をや照さめ。

六

かなた椀樹のした蹄、
甕をいだきてかへる子、

をとめと吾をわかちて、
いかゞや石にかたらめ。
あはれ吾らのながらへ、——
ながらへのみぞ、弱げに、
はた眞裸に、常世の
さびしき海にゐよりて、
沈默ぶかげのたゝずみ、——
わが世磯回の蘆の葉、
むかしも今もいのちの
破れやすきを知るのみ。

七

さは弱げさの身ゆゑに、
おほみ力にかへりて、
ふところ深の隱れに、
よみがへるべき人の世、
その新身をおもひて、
躍るや、胸の利ごゝろ。
石よ、みづから忘れて、
なが大母にゆだぬる

歸依ぞ、――わが世の導き、
智慧の火盤の忌火や。

八

あゝ蘆鴨の水がくれ、
また浮くごとき心の
常めづらなるきほひや、
いつかは荒の人の世、
汝が名に、玉のうてなの
高らかに、はたつらゝに、

天そゝり立つ日あらめ。

九

かなた、やはらの雲衣
つま紅のかくれに、
日ぞ沈み入る靜けさ、
石よ、天なる御燈、
夕づつ白き燃りの
とのゐ姿やまもりて、
夢見ごゝちの聞ほれ、

わが世の富を知るべく、
貸さじや、汝が背、暫しを。

（三十四年十一月）

神無月の一夜

一

夢こそさむれ、――魍魎の
忍びあるきのさやぎや、
秋雨そよろとしぐれかゝる

眞夜なか時のさびしさ。
おほみ光の見とれに、
酔ひては和魂おもてぶせに、
われかの心地、かくれの
物蔭ほしげの童女さびや。

二

深山つぐみの古巣に、
孵りもあへぬ雛の
いのちの閉しに思ひうみて、

あくがれ心夜な夜な、
涙もろにも祈れど、
み靈のひかりは絶えて見じを、
こよひはいかに照しの
煌なるすがたぞ、(小さながら)。

三

あゝ大慈悲のみ靈に、
さゝやき歸依の感火や、
さびしき燃りにこゝろ醉の

わが身、——火採の童部、
おほみ撰にかなひて、
常世に生くやの今の若え、——
夢とは、——かゝる明らの
心のあかしをいかに見まし。

四

さりとも今宵おぼろの、
またの夜さやに見えずば、
尊ろや、眞夜なか、背黒五位の

やはら四毛にまたぎて、
岡象も眠る水沼の
蘆原がくれに伸羽うちて、
天なる宮の御階や、
攀ぢてもふたゝび世にはあらじ。

（三十六年十月）

神無月の一日

——木の間のまぼろし——

一

日は神無月つごもり、
風氣もさゝぬ陰野に、
若木の村だち、楪ばやし、
散葉の亂れ、さながら
醜女が蠱のてだれに、
いもうと、木の花咲くや姫の
若子の御靈はらゝに、
黄泉路の大戸に落つる如や。

二

渡りの鳥のひとむれ、
伸羽なめて末廣に、
峰越のかなたへ落の今を、
葉もりの光、陰路の
星まだらなるあかりや、
ほのかに狹霧の白み射して、
ものゝ香深きくゆりに、
酔こそいざなへ、——心ゆるび。

三

あなや上枝の絡みに、
風かの渡り、しのびに
おこるは、かすけき女樂の
心あがりの物の音。
乾反葉さやぐ木の間に、
使ひ姫七たり、すがた花に、
白よそほひのなまめき、
浮ぶや、たゆげの霧のまぎれ。

四

小春の日和ゆるかに、
天なる宮のきざはし、
降り居の今かも、あまつをとめ、
秋野の女神染姫、
わが世の末のさびれに、
なぐさみ物なるすゞろ種か、
否や、側見のひとりが、
掛想の人めく髪のかゝり。

五

向きこそ直れ、——緑の
小百合葉胸にまとひて、
よわ肩圓らのなよびすがた、
そよ忘れずのそのかみ、
別れし人のくづをれ、——
彈く手も柔なる眞玉箜篌の
しろがね音色、そよろと
さながら天路の夢のゆらぎ。

六

若音のひゞきたゆらに、
搖ぶるや、木々の垂り枝、
『かつては花野のすゞろゆきに、
わが世の宵の月白、
榮えよと笑みし吾が兄子、
いまはた木原のめぐりあひに、
もの嘆かしき身樣の、
した燃ふかげの心ばへや。』

七

笙篌の音、今かたゆげに、
水波ゆらのわないき、
『み靈のくゆりよ、大み慈悲の
あまつ光の滴り、
いづれは片身、――睦魂、
二の世のあけぼの、聖き宮の
無憂樹がくれの常世に、
ひとつに歸らむ日こそたのめ。

八

その許されの後遂、
聖の世をばたのみに、
路さまたげをや超えぬべき。』と、
あなや高音の中絶に、
しろがね衣飜して、
花笑あえかに寄ると見れば、
夢かの心地、さながら
木の間にきえゆく霧のまよひ。

九

あゝ北海の浪路に、
おほ海神の手ずさみ、
潮氣にたゞよふ蜃氣樓の
すゞろ種なるならひや、
あくがれ心しのびに、
まぼろし描きし思ひあがり、
やがて吾世の轅を、
星への緣か、——おほみ諭し。

十

聖言葉や、聞くだに、
和魂ゆらぐよろこび。
相見よ、別れよ、故こそあれ、
わが世の途の事業、
また躓きのいづれか、
おほ慈悲——影身の心ならぬ、
み惠み、それを思ひて、
微笑み泣くかな、涙もろに。

（三十七年十月）

虹の歌

一、旅人

木かげをいでよ、
雨はれて、
雲洩るひかり、
はなやぎぬ。

肩の荷ぬれて、
おもくとも、
宿とる程の
ひまとのみ。

旅ゆくひとよ、
口ずさみ、
小唄となふる
ならはしや。

そよ折からの
ものと見よ、
ゆくて國原、
虹かゝる。

京への道に、
山あらば、
虹見て攀ぢよ、
つゞらをり。

谿の棧路の
けはしくも、
脚のつかれは、
忘られむ。

京への路に、
水あらば、
虹見て乗れよ、
舟わたり。

瀬々のすべりに、
うつむかば、
舟酔ごゝち、
なやむらめ。

里のわかもの、
名は知らず、
虹の橋づめ、
見てましと、

ながら堤を、
走るまに、
影うしなひし
ものがたり。

今し歌占、
をはらぬに、
虹は早くも、
くづほれむ。

あゝ世に、なにか
もろからぬ、
美しのものの
あるべしや。

されば旅寢の
ゆめまくら、
涙がちなる
夜頃かな。

一夜は米の
くろくとも、
をとめが胸の
白からば、

さぞな夜ながの
旅ごゝち、
都ごゝろに、
なぐさまむ。

群てそよけれ、
煌の環の
虹をいさみに、
かなたへと。

二、獵人

くぬぎ木原に、鹿の子の
逃のすがたを失ひて、
峰越の路にわけくれば、

あな遠山の山の端に、
虹こそかゝれ、花やかに。

南の邦の繁山の
葉もりの影に片ぬれて、
小笹のそゝけ胸わけに、
陰路をわたる獅子の背の
たてがみ色も見おとらめ。
この日天路の南より、
北なるはてへ懸けわたす、

黄金反橋、虹の輪の
かゝるにほひに比べては。

神坐すところ、高御座、
天つ童部、――添ひ星の
忌火夜な夜な燃るかた、
日は顔ばせのかゞやきに、
月は胸乳のふくらみに、
星は瞳子のきらめきに、
雲は御髪のなびきにと、

おほせられたる象りの、
物こそあれや、虹の橋、
天の榮えと營みの
ときはの花にほへよと、
大み額にかざします
黄金の冠、まびさしの
光によそふ玉の映え。

あゝ眞鳥の羽身にそへて、
雲路はるかに往くべくば、

天の反橋、はなやぎの
かなたの邦にまゐのぼり、
檀弓、眞鹿兒矢たばさみて、
おほ宮どころ、ひひ鳴の
天つ狐を追ひすがり、
すぐよか者の稱へ名に、
とのゐ姿やゆるされて、
玉の御階につかまつり、
御饗さがりの大御甕に、
甘らの酒も掬むらむを。

さもあらばあれ、雲居路に、
黄金のかむり、虹の環を、
高草の村の野のうさぎに、
蒲の穂絮のよそほひを、
法吉の里のうぐひすに、
心やりなるさへづりを、
わかちし神のみめぐみは、
また里ずみの獵人に、
妻をこそ賜へ、うら若き

わが世の誇り、これぞこの
天つ座へのあくがれを、
やがて眞白のやはは肌に、
醉ひ足すべき使ひ姫。
今日もぞ、身樣なよびかに、
萱屋の門の心まち、
み山がへりの人もやと、
峰越の路に見惱ひて、
さぞな花なるまなじりの
うるみ勝にや居凭るらめ。

あな谿岨の木がくれに、
尾長山鳥音こそすれ、
わか髪あをき山祇の
神もまもれな、窺覘ひ、
これよ、待れの今日の日の
唯の幸ぞとたはむれて、
涙もろなる乙嫁の
笑顔まろにや解くべき。

三、情人

男

花野繁路の
そゞろゆき、
うれしや、空に
虹かゝる。

身に初戀の
もゆればか、

胸こそをどれ、
今もはた。

女

若びとふたり、
草をふむ
野には、懸想の
ゆめ花に。
秋雨はるゝ。

染姫の
宮には、虹の
さかばえや。

男

君がむすべる
花の環は、
頸ひとへに、
足はじを、

おはみ手棟や
天つ女は、
千尋にあまる
煌の輪を。

女

かゝる日、人は
たはむれじ、
反わたどの、
ゆきかひに、

あまつ八少女、
さゐさゐと、
玉衣ひきて、
舞ふらめを。

男

歸依の和魂、
人去れず、
沈默ふかげの

酔ごこち、
天つおほ路に、
玉沓の
足音を聞くも、
かゝる日か。

女

さもあらばあれ、
手ばさみの、

君が右手なる
玉やなに。

左は、『戀の
鶴、鶏鳥、
然な。』と、吾手を
捲きながら。

男

こは、才たかき

うたびとの
戀ものがたり、
文の卷。

落葉ばやしの
木がくれに、
『鶺鴒』とともに、
讀みいらめ。

女

この日、野なかの
そゞろゆき、
もの深げなる
夕ながめ。

大みぢからの
花やぎに、
酔とそ足へ、
わが心。

男

傀儡まはしの
ひとさしに、
うき世の樣も、
見るといへ。

涙もろなる
歌の卷、
これや、二人の
おもかげを。

女

いにしへ人の
卷にのみ、
男ひじりの
戀ぐさや。

垂乳まろなる
ふくらみに、
隱れの玉は、

見がくしに。

男

君は野なかの
さゝら水、
われを直路に、
みちびきぬ。

この日花野の
そゞろゆき、

ふたゝび書の
名はいはじ。

女

いざ、君いそげ、
かなたなる
野なかの阜の
くぬぎ原。

虹の環かげに、

手をつれて、
鹿の子の如く、
舞はしめよ。

四、海人

嶋山かげのいさり舟、
幸こそ足へ、今はとて、
振さけあふぐ目移しに、
映ゆるや、天の桟づくり、

こがね色なる虹の橋。

波の穂しろくほのめきて、
引汐かへるかなたには、
龍の宮居のわだつみが、
長日のゆめ路いまさめて、
御門柱の居がくれに、
梁たかきおほぞらの
反わたどのを見やるにも、
さこそは天の大兄の

手だれや花に讃ふらめ、
遠つ海の音どよもしぬ。

この月、一葉の舟を浮け、
八潮路遠に漕ぎためて、
磯まにかへる海人の子の
たゆたの滑り、さながらに、
こがね煌の環、ゆるされの
玉の宮居にいたるやと、
海路の廣み、笑みがほに、

楫木にすがる浪もこそ、
眞白手あげて馴寄るかの
恋あがりのまよはしや。

をさな遊びのそのかみに、
離れ小島の山めぐり、
姫百合折るとさす舟の、
磯まを遠く漕ぎいでて、
渦潮にまよひ入り、
今はと見えし危さに、

櫂取神を念じつゝ、
手溜りふとき櫂がらの
早緒も脆にちぎれよと、
櫂音たかくきしらせて、
潮瀬はるかに避けくれば、
折こそあれや、白虹の
天路にかゝる花やぎに、
童ごゝろよ、ほこりかに、
舟側とゞと踏みはりて、
勝閧たかく呼ひしが。——

今漕ぎなれて、さながらや、
身は海神の家の子に、
晝はひと葉の小舟、
潮の八百路にわけいでて、
漁歌のどよみたからかに、
曳網ながくたぐりつゝ、
夜は蘆原の櫂まくら、
浪のゆらぎを聞馴に、
龍の宮女にさひらひて、

鵜の羽蓑屋の濱びとに、
宵の通ひをゆめみつゝ、
老いぬべき蜑が世に、
おほみ心や、日こそあれ、
ふたたび虹の花やぎに、
すぐよか心をどりては、
身は海神の孫ながら、
魂はみ空にあくがれて、
星の煌路の天の座に、
甦へる、かの思はれや、——

神よこの日のおぼろげを、
やがてわが世の最果の
その日朗らに見せたまへ。

あゝわだつみの夕ながめ、
たゆらに震ふ浪の穂に、
夕映あかりうすらぎて、
空には、かへる水鳥の
羽音のみこそ掠れゆけ。
いでや、かなたの浦めぐり、

入江の蘆に舟よせて、
夜をやすらなる夢にこそ。

五、農人

虹の環しろみに、
禍日さすと、
いにしへ人らの
心よわや。

今日しも野なかに、
小雨はれて、
うかぶや、玉橋、
天路花に。

里むら萱屋に、
人氣見えて、
粉磨ぐるなの
唄のわたり。

あるひは、培塿の
くづれ踏みて、
窖なる土龍の
路をたちぬ。

わが世のせつなさ、
いつはあらず、
日も夜も隙なき、
宿直ごこち。

樵夫は、圍爐裏に
脚をのべて、
雪の日まとひの
笑に酔ふを、

不如意や、われらは
しづれ小路、
麥ふむ兎を、
山に追ひぬ。

獵人は、山路の
瑞枝がくれ、
湧きちる岩井の
水に飽くを、

不如意や、われらは
眞夏日なか、
ぬるみの水田に、
莠ぬきぬ。

せめては、刈しほ
われは顏に、
はかなの思ひを、
よせぬべきや。

八束穗みだれて、
さやぐゆふべ、
秋の香くゆりて、
野こそかをれ。

風ゆき、蚊ばしら
浮ぶほとり、
童女は繪によき
樣に飛べり。

この時、さかえの
こがね髮、
千尋の虹の輪、
あまつ宮に。

八十日夜、山田の
宿直やつれ、
さてこそ慰め、
笑顏花に。

小走り、木かげに
ひざまづきて、
忍びに祈るや、
心ゆるび。

夕雲かげ透き、
光させど、
稲葉のしめりは、
乾こそあへぬ。

小者よ、稲鎌
今日は磨がで、
濡身の犢に、
草をかへよ。

厨房の酒がめ、
口をきれば、
うまらや、醸に
泡も咲きぬ。

こよひは、與作を
まねききたり、
田の面の實りに、
掬みて醉はめ。

六、隱者

一

この日なべての和魂
さめよと、斯くや、虹の環、
南は八千尋、綿津海に、
北は八千尋、野ずゑに、
かくるは玉の反橋、
そびらは遙かに雲に入りぬ。
あな屈りの世にしも、

自然ぞあまりに大いなりや。

二

眞闇の胞衣よ、やぶれて、
天地なれるそのかみ、
ひかりの若子は空にあれと、
虹もぞ天の常ばな、
隱れの宮にねむれど、
をりをり目ざめの時し來れば、
おほみ額をまとひて、

さかえと力の代こそ見すれ。

三

あゝ常若の八をとめ、
忌火さゝぐるかなたの
不壞なる營み、――大みぢから、
天つ心のひらめき、――
われら日陰のなよ草、
あまりにか弱き身にしあれど、
この夕映の氣壓れ、

奇しくもせつなの氣こそ見えね。

四

そよ、心憂のまよひや、
わが存への最果、
その日の疑ひ胸に入りて、
身は物怖の心地に、
わなゝきやまぬ日頃を、
今日しも天路の七つ色に、
見ればか、あはれ人の世

さこその現れ、すがた花に。

五

れら常久の瞬き、
やがては消ゆる身ながら、
あくがれ絶えせぬこゝろ魂の
常新なるともりや、
この世さてこそ虹の環、
かなたに炎の宮居ありて、
その羽含みの深にや、

醸しゝ生命の火にはあらぬ。

六

あゝ現し身のをはりに、
わが世寂しき回顧、
時刻の暗谷、——天の常陰、
すぐよか心さながら
虹なる煌を見るにも、
微笑みかへらめ、(これや嘸な、
歸るさならめ、)隱れの

おほ宮常世べ慈悲の御園。

（三十二年十一月）

二十五絃畢

正誤表

誤		正
三三頁九行	葉分は	葉分は
三四頁二行	夏の眞晝は	眞夏日なか
六二頁六行	片かげは	片かげに
九五頁八行	法起菩薩は	法起菩薩は
九七頁八行	玉の顔は	玉の顔は
一一一頁三行	黒實は	黒實は
二〇四頁八行	空は	空は
二〇八頁三行	水草は	水草は
二四〇頁六行	十六年は	三十六年
二四二頁九行	醉は	醉は
二五九頁八行	路には	路には
二九六頁四行	あへぬは	あへれ

明治三十八年五月十日印刷
同　年五月十三日發行

二十五錢
實價金壹圓

著者　薄田淳介
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田むめ
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷者　中野鐵太郎
東京市日本橋區通四丁目角
發行所　春陽堂
東京市京橋區築地三丁目十五番地
印刷所　帝國印刷株式會社

●內に發行者の印章無き出版は偽物●

再版

心のあと 山廬

幸田露伴著　久保田米齋畫

洋裝四六判
紙質精良
印刷鮮明

是れ一編の長詩なり

實價八拾錢
郵税拾錢

五版

藤村詩集

島崎藤村著　和田英作新意匠石版彩色畫挿入

洋裝四六版頗美本　實價八拾錢　郵税拾錢

是、新體詩集なり。是、若菜集と夏草と一葉舟と落梅集とに散在せる一切の詩歌を蒐集せしものなり。是、著者が開拓せし詩想の道路なり。是、新しき藝術に入るの門なり。

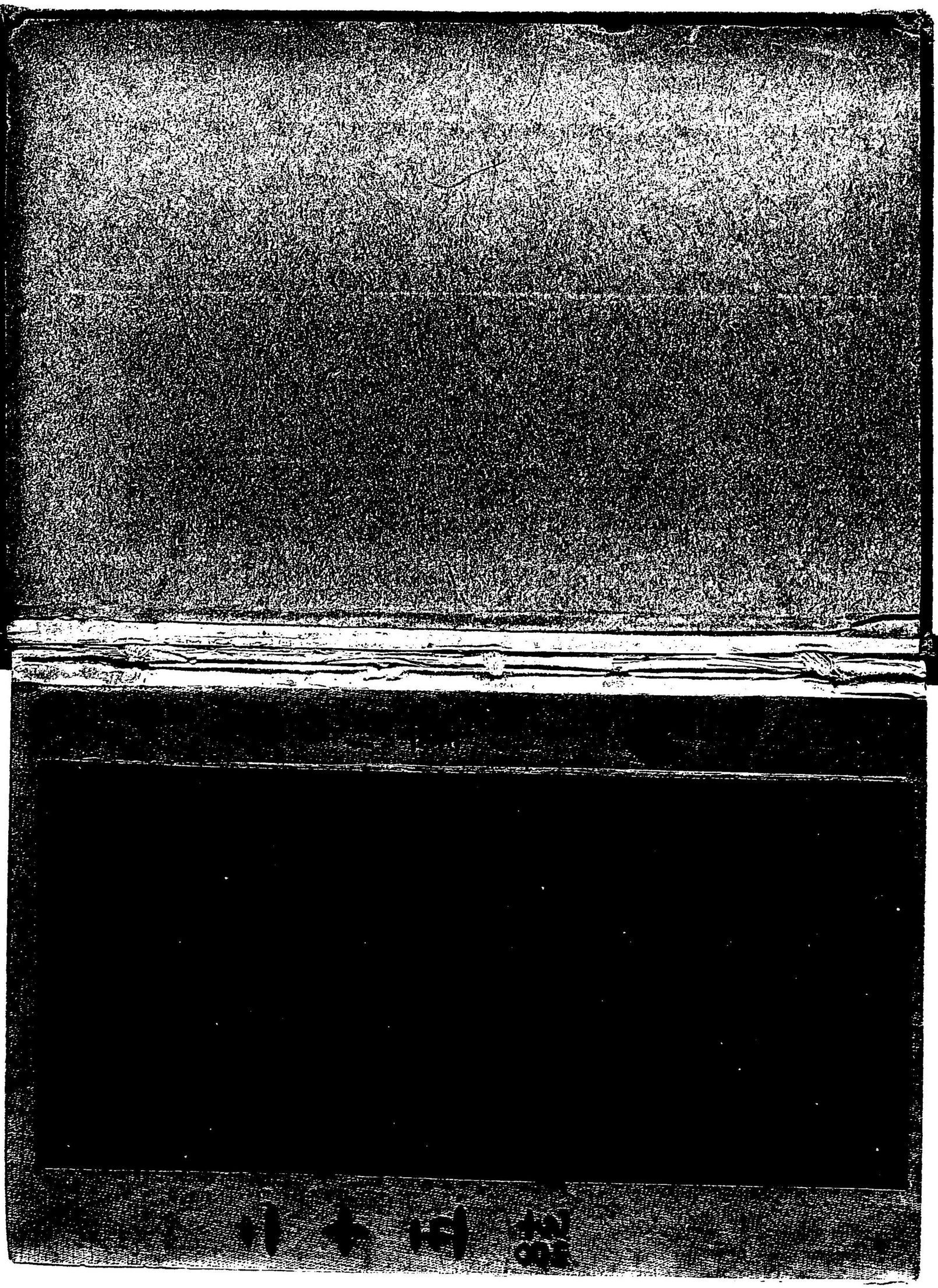
98
116

088071-000-9

98-116

二十五絃

薄田　泣菫／著

M38

DBG-0168